

---

# 【最強系（笑）】俺の異世界冒険譚【最低系（笑）】

あおたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【最強系（笑）】俺の異世界冒険譚【最低系（笑）】

### 【Nコード】

N5878M

### 【作者名】

あおたん

### 【あらすじ】

神様に呼ばれて異世界召還！

ファンタジー中世ヨーロッパ風とか鉄板すぎる

若干の手違いはあったものの、無事、チート人生始められそうだぜ！

ハーレムしつつ、最強系で最低系の主人公やってやんよ！

ってあれ、なんかおかしくね……？  
俺の冒険どくなるの！？

妄想があふれ出た時だけ投稿なので、不定期必至です。  
草（w）が大量に生えたりするタイプの小説ですので、あらかじめ  
ご了承ください。

プロローグ【夢だと思ってたら】俺はこうして、異世界に旅立つことになりま

俺の妄想があふれ出た

18禁にすると描写が面倒なので、R15レベルで

プロローグ【夢だと思ってたら】俺はこうして、異世界に旅立つことになりま

ん、なんか頭がふわふわしてる。

ここはどこだろう。

目の前には天使が一人と、その周りには球体の何か。

それ以外は、あたり一面真っ白だ。

「

」

天使が何か言った様だが、俺の頭が回ってないせいか、理解できなかった。

どうも、頭がすっきりしない。

周りがぼやけて見えるというよりは、寝起きの状態に近い感じ。

「

」

まだ、天使が何か言っているようだ。

俺はそれを右から左に聞き流しながら、ゆっくりと意識を取り戻していく。

そんな俺の頭の中で、今現在分かっていることは三つ。

・意識はある（ようやく戻ってきた）

・ここは見たことない（なんか真っ白な空間。周りに球体がごろごろ落ちてる）

・目の前には美人の天使

そうして俺が出した結論は簡単だった。

これ夢じゃね？

しかもあれじゃね、夢だと分かってる夢っていうやつ。

何回か経験したことあるし、なんかそれっぽい気がする。

ちなみに前回の経験は、

俺〓悪代官

相手〓村娘

とかでしたwwwwwwww

まあとりあえずあれだ。

俺、これから目の前の天使さんとボーンラスステージの時間ですか？

好きにしてもいいんですよwwwwwwww

うはwwwwwwwwwwつをkwwwwwwwwww

「！！」

うんうん、天使君、最早君は我が手中にあるのだよ、諦めたまえ！  
おじさんがいっぱい可愛がってあげるからね、うひひひひ

「……………！！！！！！！！」

天使がなんか叫んでいるが、これはきつとそういうシチュなんだろう。

割とはつきり聞き取れるのに、何言ってるかわからないしな。

それじゃあ早速

いただきます……………す！！

「えつとなに、つまりここは神の世界で現実ってこと？」

「ええ、ご主人様の感覚ですと、そのように思われて間違いないと思われます」

今現在、俺は天使、というか天使の格好をした神（自称）のルナに事情を聞いていた。

というのも、延々数時間好き放題し、その後のスーパー賢者モードに入ったとき、俺はふと疑問を持ったのだ。

一つ、夢ってこんなに長々と続くものだったっけ？

一つ、夢を夢と認識できる夢といっても、ここまで明確な意識とか持つてられたっけ？

一つ、童貞の俺が、何であそこまでリアルな感触を味わえたの？

等等など。まあ、細かいところまで挙げればきりが無いが、そんな感じに疑問を持ったのだ。

とりあえず現状認識しようと思って、周りを見てみると、球体の何かが落ちてたのでそれを覗いてみたら何とびっくり。

中に世界があるんだけど。

しかも、なんか俺がいたような世界なんだけど。

え、あれ、もしかしてこっつて、上位世界的な何かですか？とか思



つたんで、他の球体を見てみたら、出るわ出るわ。

SFっぽいから、ファンタジーっぽいのはたまたなんか良く分らないクトウルフっぽいまで。

ついでに、俺の言語じゃ言い表せないものなんかもあったわ。

多分あれば、確実に別の原理原則が働いてるね、間違いない。

あれ、もしかして俺、夢だと思ってやばすぎることやったんじゃない？

場合によっては、あの言葉では言い表せない世界とかに飛ばされますか？

あるいは、地獄すら生ぬるいとか言われそんな世界に飛ばされますか？

それとも、ここで存在から消滅とかでせうか……？

そう思っていると、天使がちょうどよく起きてきたわけだ。

「んっ……」とか、色っぽい声あげながら。

さすがに焦ったね。ちょー焦ったね。

焦ってどうにかしようと思ったけど、ここじゃどうにも出来ないことに直ぐ気付いたけど、でもやっぱりどうにかしたくて。

とか考えてもやっぱりいい考えが浮かばなくて。

だけど、そんな俺のことに気付いた天使の第一声が俺に光をくれま

したよ。

「ご主人様、どうされたんですか？」

ってね。

……夢だと思って好き放題してたなかで、なんだ、まあ、そういう風に調きよげふんげふんしたのが幸いしたのか。  
どうも天使の中で、俺と天使の位置関係が

俺〃ご主人様

天使〃奴隷

というのが確定しているっぽい。  
つまりところ、このままの関係でいれば俺がピンチになることもないわけだ。

そこでようやく冒頭に戻る。  
情報を持たないことにはどうしようもないから、俺は内心びくびくしながらも、偉そうに天使に色々聞いてみることにしたのだ。

その中で分かったのは以下の通り

- ・天使は、俺の世界で言うところの神みたいなもので、名前はルナっていうらしい。
- ・俺のいた世界は、あの球体の中にあり、ルナが観測して暇を潰すために作ったものらしい。

・その辺に転がってるのも全部同じようなもので、それぞれ別の世界らしい。

・俺がここにいるのは、どこか別の世界に放り込んで、その中であたふたするのを見て楽しむためだった。

・ちなみに召還当初喋っていたのは、俺には理解できない言葉みたいなものだったらしい。ルナはドジッコ。

あれの過程で気付いて、俺にも分かるように変えたらしいが。

簡単に言えば、以上である。

転生テンプレ乙と言わざるをえない。

正直バッチコイですけどね、ええ。

「で、これからどうすんの？」

「えっと、あの、ご主人様はどうされたいですか？元の世界に戻すことも可能で」

「ファンタジーの世界に飛ばしてくれ！」

「ひゃいつー！」

どうしたいとか聞かれたから、即答しちゃったよH A H A H A !

俺のあまりの勢いにルナは驚いていたみたいだが、しょうがなくね？だって、異世界にいけるんだぜ？

しかも、異世界に飛ばす神が俺のいいなりだから、俺の思い通りなんだぜ？

行くしかなくね？

ていうか、ここでNOって答える奴は、リア充だ。モゲロ。

「えっと、仕様というか、世界観というか、そういうのはどうしますか？」

「中世ヨーロッパ風味の剣と魔法の世界。

俺の容姿はトトリのアトリエのステルクで。ただし、年齢は18あたり。

ヒロインの一人にツエツイっぽい容姿の子ヨロ。

後はあれだ、俺に都合がいいように適当に」

神様だし、とりあえずこれだけ言っておけば十分だろう。

きつと、俺の頭の中とか覗いて、ばつちりやってくれるに違いない。ちなみにトトリのアトリエはプレイとかしてないけど、画像だけ持ってる。

ツエツイの可愛さは異常。異論反論は認めない。

「はい、準備が出来ました、ご主人様」

「お、早いな。んじゃ早速頼むわ」

俺がちょっとツエツイと脳内で戯れてる間に準備が出来たらしい。なんか早すぎる気もするが、そこはあれか。神だし俺の常識とか通用しないんだろう。

「それではご主人様、いつてらっしゃいませ」

ルナのいい笑顔を見ながら、俺の意識がブラックアウトしていく。  
ていうか、笑顔が良すぎて逆に怖いんだけど、信じていいんですよ  
ね！？

こうして、俺の異世界冒険譚は始まった。

## 1【王道】チート人生始まるよ！【テンプレ】

「知らない天井だ」

とりあえず、気付いた時ベッドで寝てたので、テンプレに沿って言うてみた。

「目が覚めましたか？」

と思つたら、人に聞かれてたでござる！

え、やべっ、はずかしいんだけど。

つて思つたけど、よく考えたら、ネタだと知らない人なら恥ずかしいくないことに気付いた。

とりあえず、声のした方を見る。

そこにいたのは、腰まで伸びる青い髪を持った少女だった。

なんていうか、『とある魔術の禁書目録』のインデックスをもうちょつと清楚にした感じ。

いや、あれも一応清楚なはずなんだが……そこはおいておいて。

着ている服は、一般市民のそれっぽいけど、汚らしさは無い。

それ以外に俺が言えるのは、今までに見たことないぐらいの美少女であるということだけである。

.....

いいよいいよ、ルナ、君は最高だ！

わかってる、わかってるじゃないか！

最初はやっぱりこうじゃなきゃダメだよな。

倒れている俺を見つけ、介抱してくれる美少女という、なんとも王道的な展開。

素晴らしい！

ルナを後で褒めてやらねばなるまい。

「あの、大丈夫ですか……？」

おっと、紳士たる俺としたことが興奮して、美少女の相手をするのを忘れるとは。

こころは、紳士として丁寧に対応せねばなるまい。

「ああ、大丈夫……」

大丈夫って言いながら起き上がろうとしたら、ふらつときたでござる。

貧血とかそんな感じ。

「あつ、ダメですよ。いきなり起き上がったのは。ずっと寝てたんですから」

そーなのかー。

しかたないので、無理をせずベッドに倒れこむ。

つか、ベッドかてえ。

でもそこまで不快に感じないのは、俺の体がこの世界に適應してるからなのかもしれん。

適應してるのは肉体だけなのか、精神も適應してるのか。

精神も適應してるなら、生き物殺してもなんとも思わなかったりするんだろつか。

まあとりあえず、喉渴いた出ござる。

「ごめん、水が何か貰っていいかな。少し喉が渴いてる」

「分かりました、直ぐにお持ちしますね」

そう言つて部屋を出て行く美少女。

扉を閉めると、続いて階段を下りる音が聞こえてきた。

この家、二階建て以上なのか。中世ヨーロッパ風のはずだが、中々リッチな家なのかもしれん。

そんなことを思いながら、体を動かしてみる。少し動かしてみた感じ、違和感とかは特に無い。

部屋に鏡が無いので容姿は現時点ではよくわからんが、ルナならきつと何とかしてくれているはず。

つまりイケメン（笑）しかも能力はチート（笑）

そう思った時、瞬間脳裏にステータス画面と思わしきものが現れた。



例えるなら、妄想がMAXレベルで行われた時の明確さとも言  
べきか。

自分で思っておいてあれだが、その例えはねーわ  
wwwwwwww

とりあえずステータスを上から確認していく。

そして、ステータス欄まで目を進めた時、俺は心臓が止まったのか  
と思うくらい驚いた。

「H A H A H A ! …… 見間違いだよな、セニョリータ」

もう一度最初から見直す。

すると、HPやマナの部分で一度目を止め、絶望を味わいながら、  
再びステータス欄に目を向けた。

そこにあったのは、過酷なまでの現実だった。

Ag 1 / 99

Dex 1/99

V  
i  
t  
  
1  
/  
9  
9

Int 1/99

俺終了のお知らせ。

初期分配用のポイントは無いようである。  
つか、これ幼児なみのステなんじゃね？

ルナ出てコイヤゴリアー!!!!!!!!!!!!!!

とか強く思ってみたけど、何も起こらなかった。

とりあえず、思いつく限りの罵詈雑言を思い浮かべてみる。

語彙が少なすぎて全然思いつかなかったが、ルナは反応しなかった。

…  
…  
…  
…

とりあえず言いたい事言ったので、落ち着いてきた。  
そこで俺は、とある単語を思い出す。

『暇潰し』

そういえば、俺が異世界に飛ばされる理由は、当初、『暇潰し』だった。

それを前提に考えると、なんか色々納得してしまうのだ。

神の世界の時点から、俺を騙していたのでは無いか。という仮説。

上げるだけ上げてから落とした方が、面白いという真実。

俺が惨めに生きていくのが楽しみだと言っていた。

俺に襲われたのだって、よくよく考えればおかしすぎる。

俺を送り出す時のあの笑顔。どう考えても不自然でした。

つまり、ここで俺を絶望させるのが目的だったということだなH A  
H A H A

o r z  
なんてこったい……

だがしかし、OK、百万歩位譲ってステが初期値、それはいい。  
弱い状態からスタートなんてのは、RPGで考えれば常識だ。  
だから、そこは目をつむろう。

だけど、だけど、お願いだ、ルナよ。

ただ一点でいい。ただ一点だけ俺のわがママを通していてくれ。

どうか、イケメンでありますように。

N a m e : リ ョ ウ

称号：記憶を失ったへたれ

H P : 1 5 / 1 5

マナ：0 / 0 ( 0 )

ステータス

S t r 1 / 9 9

A g i 1 / 9 9

D e x 1 / 9 9

V i t 1 / 9 9

I n t 1 / 9 9

ユニークスキル

・ 人生の選択

どのような人生を送るか、設定できる。

本人の意思にかかわらず、数値に応じた人生になる。

数字が大きいほど高い。 1 ～ 5 で変動。 最大 5

シリアス 5 (固定)

エロス 1 (固定)

・ 真実の目

自己及び他人のステータスを、ある程度の範囲で確認することが出来る

スキル

・ 無し

# 1【王道】チート人生始まるよ！【テンプレ】（後書き）

うまく書ききれないなあ

ステとか色々は、文中でなるべく説明しますので、地球一周する位首を長くしてお待ちください



## 2【人生】俺の物語が始まったと思ったら、終了が確定していた【オワタ】（前

0、1を投稿したのが確か午前4時とかなのに、お気に入り登録4件とか……

おまえら、マジ愛してるw w w w w w w w  
おかげでパワーが湧いてきたお！

## 2【人生】俺の物語が始まったと思ったら、終了が確定していた【オワタ】

そうやって俺が悩み悶えていると、ノックの音とともに扉が開かれる音がする。

ノックしておいて、返事を聞く前に扉開けるとか意味なくね？と思いつつ、扉に目を向けるとおっさんだった。

おっさんはおっさんでも、ダンディーかつマッチョなおっさんだった。

髪はブラウン。

しかも、威圧感というか、偉そうなオーラの何かが出ている。

何もんだよ、このおっさん。俺がそう思った時、やはり勝手にステータス画面が現れた。

Name：ラルフ・サンダース

HP：1518 / 1518

マナ：738 / 738 (2)

ステータス

Str 35 / 99

A g i	2 5 / 9 9
D e x	2 7 / 9 9
V i t	3 4 / 9 9
I n t	2 9 / 9 9

この世界の人間の標準が分らんが、このおっさんはきつと強い気がする。

つか、この威圧感というかオーラっぽいのがあつて弱いとかだったら、この世界怖すぎるわ w w w w w w w w w w

しかし、自分のを見た時と違って色々足りないな。

称号・ユニークスキル・スキル、この三つがこのおっさんのは見えない。

ステータスより、そっちの方が重要なんだろうか。

「調子はどうだ？」

そんなこと考えてたら、おっさんに話しかけられたでござる。

おっさんの口調はいかめしいが、一応心配してくれてるのはなんとなく分かる。

もちろん、信用されてるわけではないみたいだが。

「ああ、悪くない」

ちよ、俺自重しろw w w w w w

なんでタメ語なんだよw w w w w w w w

ステの差考えたら、余裕で丁寧語の上へりくだるべきだろw w w w w w w w

そうじゃなくても助けしてくれた相手なのに、俺さん、なにやってるんすかw w w

「記憶はあるか？」

おっさんは特に気にしないという風に話を続けてきた。

さすがです、こんな俺相手でも、きちんと相手してくれるなんて。つか

「記憶……？」

なんで俺の記憶が無い（っていう設定になってる）ことを知ってた？

言った覚えとかないんだが……。

起きてからの俺の言動？それとも保護された時の状態？  
なんかやったのか……？

「私のユニークスキルは、対象の状態等を知ることが出来るものでな、それでわかったんだ」

はい、口に出してない疑問にお答えいただきありがとうございます。  
つか、心読むなwww  
そしてあれでしょ、俺のステで記憶云々って称号の所でしょ？  
『記憶を失ったへたれ』でしょ？

うはwwwwwwwwwつをkwwwwww  
かつこわるすwwwwww

そして、俺の持つてる『真実の目』のようなステ確認系スキルって、  
もしかしたらレアなんじゃないかなあ……とか思ってたのに、  
ごくごく普通にあるのかよwww

へwwwwwwこwwwwwwむwwwwwwわwww

しかも、このおっさんは俺の称号を確認できて、俺はこのおっさんの称号確認できないんだろ。

つまり、俺の『真実の目』の方が下位なんだろ？

……へこむわ orz

「記憶が無い状態で聞くのも酷だとは思うが、こちらにも事情があるってな。今後の身の振り方を聞いておきたい」

俺が一人で悶えてたのを、記憶が無いということに気付いて愕然としていた的に捉えてくれたんだろう。

おっさんが、割とすまなそうに聞いてきた。

「つか、どうしたいとか聞かれても、答えなんて決まってるんだが。」

「しばらく、ここに置いてくれない？」

美少女いたし。俺のステ低すぎワロスだし。美少女いたし。この世界の常識知るまで外とか怖くて行きたくないし。

美少女いたし。おっさん多分強いっばいから、戦闘の仕方教えて欲しいし。美少女いたし。

まあ結論として、美少女がいるから俺はここに残りたいということなんだが。

おっさんは若干渋い表情を見せたものの、どうせはじめから結論なんて決まってたんだろう。

了承してくれた。

そうして話が一段落付いた所で、扉をノックする音が聞こえる。

「失礼します、お飲み物をお持ちしました」

そう言いながら、美少女が入ってきた。

手にはお盆と、その上に水差し、そしてコップ。

どうやら、俺の為に水を持ってきてくれたらしい。感謝。

「キルト。彼はしばらくここに留まるそうだ」

「まあ、そうなんですかつ！」

そう言つて、美少女（キルトっておっさんが呼んでた）は、こぼれるような笑みを浮かべる。

「私は、キルト……キルト・ミルファと申します。これからよろしく願いますね」

丁寧なお辞儀と、続いて満面の笑み。

ぐはあっ！なんだこれは！

衛生兵！衛生兵を呼んでくれ！破壊力が高すぎる！

これが噂のニコぼなのかつ！？

ニコぼなんだなっ！？

ていうか、ぼっさせられたの俺かよ！

そして、ニコぽって主人公特権、すなわち俺の特権じゃないんですか、先生っ！？

「ラルフ・サンダースだ。よろしく頼む」

おーけーおっさんありがとう。

おっさんの方に意識が向いたおかげで、俺のテンプレーションが解けたぜ。

ニコぽに動揺したが、もう負けない。

今度、お返しにナデぽなるものをお見舞いしてやるぜ、キルトっ！

「リョウだ。記憶を失ってるので迷惑をかけると思っが、よろしく頼む」

こうして、俺の異世界冒険譚（笑）が始まった……



N a m e	:	キルト・ミルファ
H P	:	60 / 60
マナ	:	50 / 50 (5)
ステータス		
S t r		4 / 99
A g i		5 / 99
D e x		10 / 99
V i t		4 / 99
I n t		23 / 99

### 3【エロゲ脳】ニコぽされた俺がナデぽする為に頑張るお話【乙】（前書き）

今回次回は下準備……

### 3【エロゲ脳】ニコばされた俺がナデばする為に頑張るお話【乙】

「おはようございます」

そんな声に起こされたさわやかな朝、皆様いかがお過ごしでしょうか。

私は今、大変夢見心地であります。

『美少女に、朝起こされる』これなんてエロゲ？

「おはよう、キルト。それと、起こしてくれてありがとう」

ありがとう、本当にありがとう。

君のおかげで、俺の夢が一つ叶ったよ……！

朝食が出来ているということで、下に向かう。

朝食はパンとスープ。大変おいしゅうございました。

正直もう少し質素な感じかと思ってたんだが、そこまでもないようだ。

なんせスープには具として野菜が結構入っていたし、パンは二つも貰えたからな！

これがこの世界の平均かどうかはわからないが、少なくともここにいる間にひもじい思いをしなくて済むというのはありがたい。

「リョウさん、体調の方はどうですか？」

「ばっちりだよ、もう問題無い」

実際問題は無い。ただ純粹にステが低いだけで、状態異常などにはなっていない。

「そうか。なら今日はキルトの仕事を手伝ってもらっぞ」

「了解、衣食住の分くらいは働くかね」

「リョウさん。よろしく願いしますねっ!!」

キルトの顔がキラキラ光ってるように見えるぜ……。

さすがニコぽ使い。

可愛すぎておじさんのハートがリミットブレイクだお!!

そんなこんなで朝食を終えた俺たちは、瓶を持って川に向かっていった。

「ひいーくらひいーくら……」

おっさんは狩りに行くと言って出かけた。  
俺とキルト二人つきりk t k r!

「ひっひっふー。ひっひっふー」

「リヨウさん、大丈夫ですか？」

「だいじょ……うつぶっ……！」

……うん、瓶がね、すっげー重いだよ。  
キルトはごくごく普通に持つてるけど、おじさんいっぱいいっぱい  
ですよ。

サイズ的には、現代日本のポリバケツくらいなんだけどね、陶器だ  
かなんだか細かいことはよくわからんが、とりあえず重い。  
STR1だと、きつきつなぐらい、重い。

とはいえ、まだ持てたんだ。まだ持てたんだよ、この時までには……。

「ふんぬらばっ！」

「……………」

いやね、ひーこらいいながら川まで辿り着いて水を入れたら、皆様

ご想像の通り。

まったく持ち上がらなくなりました。テヘッ

俺弱すぎワロタ

いやSTR1なのは知ってたけどさ、これはひどくね？

そういや、川に映った自分の顔はイケメンだったけど、そんな今の状態じゃ気にしてる余裕が無い。

「やつ、病み上がりですからね。持てなくてもしょうがありませんよっ！」

フォローあざーす。

とはいえ、僕男の子。

そんなこと言われてしまいますとですね、見栄を張ってしまいたくなるお年頃なんです。

というわけで、頑張ってみた。

顔を真っ赤にさせつつ、必死に。

そしたらね、持ち上がったんだよ。いや、まじで。

これが火事場の馬鹿力とでもいうやつなのか。持ち上げた俺がびっくりしたわ。

その後、10メートルおき位に休憩を取りつつ、足をプルプルさせながらも必死に運んだ結果、キチンとみっちゃコンプリートできました！

みっちゃんってなんやねん。何故脳内でいい間違えるのか……。いくら疲れてたって、これはねえだろ、俺wwww

「それじゃあ、私はもう一度行ってきますので、リヨウさんはそこで休んでいてくださいね」

……ぱーどうん？

一人情けない姿をしてぶっ倒れている俺を尻目に、キルトは次の瓶を持って出かけようとしていた。

そして、その近くにはもう一個空に見える瓶が……。

……おーけー分かった。

もちろん俺も行きますよ。

いくら俺のステが低いからといって、男の子の俺が力仕事で休むわけにいかないだろう、常識的に考えて。

ということで、無言で立ち上がり瓶を持つ俺。

「あつ、あの。お疲れのようですから無理をしなくても大丈夫ですよっ？」

「男には、譲れない意地があるのさ……」

「えーっと……」

とりあえず、キルトが何か言いたそうなのを無視してどんどん先へ。なんか普通に空の瓶を持てました。

と思ったら、水入れてもなんとかなった。さっきほど重く感じなかった。

これはきつとあれだね、慣れたとかじゃなくて男の子の持つ不思議

ばわーだね。

「ありがとうございます、本当に助かりました」

ついでに満面の笑みを浮かべながらこんなこと言われたら、頑張つてよかったって思うわ。

その後、一般的な家事一般を手伝いながら（最初失敗しまくってたけど、最終的には慣れました）その日は普通に終わった。

N a m e : リ ョ ウ

称号：記憶を失ったへたれ

H P : 2 1 / 4 8

マナ：0 / 0（0）

ステータス



S t r 4 / 9 9 ( + 3 )

A g i 1 / 9 9

D e x 4 / 9 9 ( + 3 )

V i t 3 / 9 9 ( + 2 )

I n t 1 / 9 9

## ユニークスキル

### ・ 人生の選択

どのような人生を送るか、設定できる。  
本人の意思にかかわらず、数値に応じた人生になる。  
数字が大きいほど高い。 1 ～ 5 で変動。 最大 5

シリアス 5 (固定)

エロス 1 (固定)

### ・ 真実の目

自己及び他人のステータスを、ある程度の範囲で確認することが出来る

スキル

・家事  
LV4

### 3【エロゲ脳】ニコばされた俺がナデばする為に頑張るお話【乙】（後書き）

前書きがおかしかったのを修正

8 / 1 1 2 0 : 1 1

4【俺TUEEEEEEE】それでも俺は、冒険者に憧れる【したいんです】

主人公の地の文での口調がころころ変わるのは仕様です。  
物語に展開があるのは次回から。

#### 4【俺TUEEEEEEE】それでも俺は、冒険者に憧れる【したいんです】

それから二日程、同じように水汲みやら家事やらして過ごした。

初日は、時間かかりすぎ+下手すぎワロスwwwwwwって感じだったが、今では立派に主夫になりました。

家事スキルが気付いたら6になってます。

キルトの家事スキルがどのくらい知らんが、大体同じくらい動けるようになってる。

ステはこんな感じ

ステータス（カッコ内は前回比）

Str 6 / 99 (+2)

Agil 1 / 99

Dex 5 / 99 (+1)

Vit 5 / 99 (+2)

Int 1 / 99

Strは一昨日で5になり、昨日6になった

Dex・Vitも同じく一昨日で5になったが、昨日は上昇しなかった。

昨日一昨日とやってる内容はほとんど変わらなかったはず。

これらのことをベースに、この世界のステのシステムを考えてみる。

1・5 6にする為に必要な経験値が多い、あるいは5以降必要経験値が一気に増大する

2・家事で上げられる数値の上限が決まっている

3・家事に慣れた(家事スキルが上がった)ため、獲得経験値そのものが少なくなっている

今ぱつと考え付くのはこんな感じか。

とはいうものの、正直ここから先は現状では判断のしようが無い。家事を三日やった程度で、世界のシステムそのものを理解できるほど優しくは無いだろう……たぶん。

この世界で生きていくうえで、システムを理解することは、真実の目を持っている俺にとって大きなアドバンテージになるはずだ。

人生の選択によってシリアスで固定されている以上、やれることはやっておきたい。

まだ死にたくないし、ナデぽもしてないしな！

「リョウさん、洗い物終わりましたか？」

「後ちょっと」

そんなことを考えながら、私こと冒険者を目指しているはずのリョウは、今日も今日とて家事を頑張っています。  
でも、こんな日常もいい……かも……？

「ふっ！ふっ！ふっ！……」

ステとスキルが上がったおかげか、今日は家事を終えてもまだ時間と体力が残っていた。

なので、現在絶賛素振り中である。

素振りと言ってももちろん野球の素振りではなく、剣の素振りだ。

まあ、振ってるのは木の枝なんだが、それは置いておいて……。

なぜかといえばそれはもちろんあれですよ、あれ。

ファンタジーなんだぜ？

剣と魔法の世界なんだぜ？

俺TUEEEEEEEEEが夢見れるんだぜ？

男の子としては俺TUEEEEEEEEEを夢見ざるをえないだろう、常識的に考えて……。

そんなわけで、体力と時間がある以上、少しでも強くなる為に努力してるわけです。

最初は素人がお手本も無しに素振りするとか、よくないんじゃない？とか思い、ただの筋トレにしようと思ってたんだが、あることに思い当たって素振りにした。

あることってのは『スキル』の存在だ。

ここ数日の家事手伝いで、俺には『家事』のスキルがついていることを確認している。

一番最初に確認した時には存在しなかったにもかかわらず……だ。しかもこのスキル、レベル制であり、やればやるほど伸びている。ここで考えられることが一つ。

もしや各種技能はスキルレベルで表され、最初は全て0であるだけなのではないかということだ。

ある種、当たり前と言えば当たり前なのかもしれない。

ただこれが本当だとすると、筋トレなんて効率が悪いことになる。

なぜならster、おまけでvit位しか上がらず、戦い方そのもの、すなわちスキルレベルには影響が出ないからだ。

この世界の計算式が、ステータスよりなのかスキルレベルよりなのかは分からないが、片方が0なのはさすがにお粗末過ぎる。

ということで、俺は素振りすることにしたのだ。



簡単に言えば、「訓練するなら剣の練習もしたほうがいいよね」「これだけのだがががが」

とまあ、脳内で絶賛一人討論会中の俺だが、そんなことしつつもキチンと素振りはしております。

そしてそんな俺を眺める一人の男……というかおっさん。

「……………」

まあ、ここにいるおっさんなんて一人しかいないので、もちろんラルフさんです。

俺が素振り始めた直後、ちょうどよく狩りから帰ってきたのかばかりに会いました。

ちなみに、手には獲物。採れたてピチピチであろう、ウサギっぽい何かです。

この肉は初めてです。血がついて黒っぽくなっていますがグロイとか言ってられません。

後でさばくの手伝って、しっかりと夕ご飯にしようと思います。

どんな味なのか、今から楽しみですよ。

## 閑話休題

さて、素振りを始めて直ぐにおっさんと遭遇した俺。

おっさんは最初、スルーしようとした。

俺も俺で、なんかへたつぴなのを練習してる所を見られて、若干気まずかった。

ので、双方スルーのままフェードアウトになるかと思ったんだが……。

おっさんが見てくるんですよ。

通り過ぎながら、首の角度を変えつつ、ずっとこっちを見てくるんですよ。

しまいには、首が180度回ってました。

そして顔には、『言いたいことがあるけど言っていないものかどうか……』と微妙な優しさと困惑を混ぜ合わせた表情が出てました。

そこで強くなるうと決めたからには恥なんて関係ねえ！っーから見られたし今更だろ、常識的に考えて！

という思考になった俺は聞きました。

「何かアドバイスはありますか？」

「握り方がおかしい。脇を締める。足の開き方が変だ。足の踏み込みが……」

ダメだしキターーーー！

なんていうかね、この一瞬でそんなに分かるものなのか……と。

っていうか、いくらスキルレベル0とはいえ、そんなにダメな部分が多いのかと。

ていうかオッサン容赦ねえなど。

まあ、強くなろうと思ってる俺ですから、もちろん素直に聞きましたよ、ええ。

ステータスが平均30くらいあるんですよ？

狩りとかしてきちゃうんですよ？

っていうか、明らかに人とか殺してそうな顔してるんですよ？

そんな人が言う言葉を素直に聞かないとか、考えられないだろう、常識的に考えて。

そして今現在。おっさんも言うことを言ったのか、俺のことを静かに見守ってやがります。

時々『これで大丈夫？』的な視線を送るんですが、何もリアクションがありません。

大丈夫なのか、大丈夫じゃないのか、あるいは聞いたことくらい一度で覚えるってことなのか、わからないから困ります。

まあ、最初にあれだけ細かく教えてくれてたんだし、多分このままでもいいってことなのでしょう。っていうか、そうであってくれ。

「ふっ！……………ヴァー」

おっさんに見られると言うプレッシャーを浴びながらの素振りに体力が限界を向かえたのか、悲鳴と言うにはおかしい音を発しつつ、俺は地面にぶっ倒れました。

少し目を閉じて休憩。

地面の冷たさが気持ちいいです。汚れた服を洗うのは、明日の俺なので問題無し。

「おい」

そうして数分くらいぶっ倒れていたところ、おっさんが声をかけました。

目を開けて体を起こし、声のした方を向くと、そこにはおっさんといつの間にか持ってきてきている剣。

両刃の西洋刀。

サーベルとかそういうものではなく、なんというか、グレートソードって感じ。

日本刀のような美しさも無く、切るというよりは裂くという感じの使い方になりそうな剣。

古めかしく、ところどころに使われた後はあるものの、なんというか大切にされてたんだなあと思わせる雰囲気を持っている。

何ぞこれ？という感じでおっさんの顔を見上げてみる。

「お前にやろう。剣をやるなら、いつまでも木の棒じゃ格好がつかないだろうからな」

そう言っただけ。

ずっしりと感じる重みは、木の棒とはまた違ったもの。

それと同時に、何か思いのようなものも一緒に受け取ったんじゃないか、そんな気分を味わった。

「ありがと、これで戦える」

ニヤリと笑いながら、強がってみる。

「ふつ、言ってる」

おっさんも笑みを浮かべながらそう言つと、踵を返して家のほうに向かう。

「夕食に遅れるなよ」

そう言つて去っていくおっさんを見ながら、俺はもう一度、心の中で感謝を述べるのだった。

N a m e : リヨウ

称号：記憶を失ったへたれ

H P : 10 / 56

マナ : 0 / 0 ( 0 )

ステータス

S t r 7 / 99

A g i 2 / 9 9

D e x 6 / 9

V i t 7 / 9 9

I n t 1 / 9 9

## ユニークスキル

### ・ 人生の選択

どのような人生を送るか、設定できる。  
本人の意思にかかわらず、数値に応じた人生になる。  
数字が大きいほど高い。 1 ～ 5 で変動。 最大 5

シリアス 5 (固定)

エロス 1 (固定)

### ・ 真実の目

自己及び他人のステータスを、ある程度の範囲で確認することが出来る

## スキル

### ・ 家事 L V 6

・両手剣  
LV5

5【おっきくって】初体験は、おおかみさんでした【速いんです】（前書き）

待っててくれたみんな愛してる。

ようやく納得のいく感じになったので投下。



## 5【おっきくって】初体験は、おおかみさんでした【速いんです】

翌日、特に筋肉痛とかも無く当たり前のように一日が始まった。

朝起きて、飯を食べ、おっさんが狩りに行くのを見送り、使った食器を片付ける。

うん、いつも通り『主夫』の朝ですね、わかります。

だがしかし、昨日の俺とは違うのだよ、昨日とは！

なぜなら、俺の腰に刺さっている ついでに半分引きずっている

昨日おっさんに貰った剣があるからでしてよ奥様！

RPG風にしちゃうと

武器：グレートソード（中古） 装備中

的な感じですよ。

ようやくファンタジーって実感ががががが。

と、身に着けた当初は思っていました、ええ、厨二病回路全開だったんで。

でもね、あれなんですよ。

## 超 邪 魔

でかすぎワロス。

腰に挿すより背負いたいわ。

いやまあ、慣れてないから背負っても邪魔なのは変わらないかもしれないが。

とりあえず今日は、男の子の意地というなの何かに後押しされ、このまま腰につけて過ごすけどな！

運がよければDEXとかVITとかSTRとかあがるかもしれない

し！

まさかの魔物とのエンカウントのあるかもしれないし！！！！

という言い訳を自分にしつつ、食器洗いも終わったのでハイパー水汲みタイム発動。

よし、おじさん頑張っちゃうぞー、やけくそ的な意味で。

「それじゃありヨウさん、いきましようか」

「おうともよっ！」

最初に作ったはずのキャラが壊れてるような気もするが、気にしないっただけにしない。

俺のキャラの変化なんて、キルトはそんな小さなことに気にするようない子じゃないもんっ！！

そんなどうでもいいことを考えながら水汲みに向かって森の中を歩いていると、犬の遠吠えのようなものが聞こえてきた。

それを聞いてキルトが足を止めるので、俺も立ち止まる。

直ぐに犬の遠吠えのようなものは数を増していき、森中から聞こえてくるようになった。

もしやこれって……

イベントk t k r!!!!

腰に剣を挿してたのもフラグなんですね分かります。

それを言うなら昨日剣の練習したのもフラグですねわかります。

ついでに言えば、キルトと二人きりの時にイベントが起きたのも  
r y

「リヨウさん、これはウルフの啼き声です！

本来はこんな所に入る魔物じゃないんですけど……。

とにかく、囲まれきってしまう前に逃げましょう！」

そう言っただけ俺の手を握るキルト。

やわらかすぎワロスwww

あ、一応水瓶は脇に置きました。投げ捨てたりはしてないですよ？

キルトに引つ張られながら走る俺。

キルトは焦っているようだが、俺は正直全然焦ってなかったりする。  
なぜなら実感がまったく沸かないからだ。

魔物とかいう見たこと無いものを怖がれと言われてもいまいちピン  
と来ないの一点。

RPG的に考えれば、主人公が覚醒するためのチュートリアル的戦  
闘なんじゃね？とか考えてるのが一点。

ウルフって名前まんますぎじゃね？せめてワーウルフとか少しはひ  
ねれと言わざる終えない。とか考えてたの一点。

ようするに、ゲーム脳乙状態だったわけである。

そんなことを俺が考えているうちに、早くも家が見えてきた。

そんな長距離だったわけでもないんだが、キルトは息を切らしながら、家が見えてきたことに安堵したのか少し走る速度を落とした。思ったたら、そのまま足を止めた……。

「ん、どしたの？」

家が目と鼻の先にあるのに、急に停止したキルトを不思議に思った俺は声をかける。

しかしキルトはこちらに目を向けることなく、前方の一点を注視していた。

俺の手を握っている手にも、さっきより力がこもっている。

「……狼ってこんなに大きかったっけか？」

思わず俺の口から声がこぼれたのはしょうがないと思うんだ。

キルトの向いている方を見ると、そこにいたのは美しく生えそろえた銀色の体毛を風に走らせている狼だった。

言えることは、とりあえずでかい。

体長とか良く分かんが、普通に四足の状態で高さが俺の腰くらい

まである。

あれだ、ゴールデンレトリバーより少し？大きいくらいだと思っ多分きっと。

「どうしよう、もうこんなところまで来てるなんて……………」

俺がそんな風にウルフのことを観察していると、キルトは心底おびえたように呟いた。

手も震えだしているのが分かる。

いやー、そりゃ怖いですよー。だってあれですよ、ゴールデンレトリバーよりデカイ肉食獣がこっち狙ってるんですよ？

怖いに決まってるだろう、常識的に考えて。

「んじゃま、俺が相手してるからその間に隠れててくれや」

そう言いながら、キルトと繋いでいる手に力をこめる。

僕達男の子。やっぱりどうしようもなく、女の子の前で格好付けたくなるものなんです。

それにほら、俺精神改造受けてるはずだからこのくらいなら怖く

「リョウさん、無理しないで下さいっ！手だってこんなに震えてるのに……………」

おうじーざす、震えてるのは俺の手だったよH A H A H A !  
そりゃーね、怖いですよ！

怒った犬ですら怖いのに、あのサイズの狼が殺しに来るんだぞ！？  
怖いに決まってるだろ、常識的に考えて       ！

なんて思っていることは間違いないんですが、そこはまあ、  
ほら、やっぱりね。

男の子として、可愛い女の子の盾になるのはやむなしですよ。  
格好いいとこ見せたいしな！

「何、武者震いさ。それよりもきちんと俺の勇姿見ててくれよ？」

ここでウィンク！

いつもなら俺きめえw w w w w w w wとか思う所だが、今は上手く  
出来てることを祈らざるをえない。

俺がびびってるのばれるわけにはいかないしなっ！

「ダメですっ！ここでリヨウさんに何かあつたら私はっ……！！」

これなんてエロゲ。会ってたつた数日でフラグですか？  
やっぱイケメンだから……キルトに限ってそれはねーか。  
イケメンとか気にしなそうだし多分きつと。

他に理由があるかもしれんが、今はそんなこと聞いている暇は無いか。

これ以上何を言うでもなく、俺はキルトから手を離す。

キルトはまだ何か言いたそうにしていたが、それでも俺の本気を感じ

じ取ったのか、少し離れた。

俺が剣を抜くと、今まで俺達をうかがうようにしていたウルフが攻撃意識を高めたように思えた。

こんなタイミングで剣持っていたり、ウルフが俺を待っていたりと、さすがご都合主義の異世界だと思う。

だからどうせなら、この結果までご都合主義になってくれないかと思いつながら、ウルフに向かって剣を向ける。

シチュエーションは完璧。

昔はこんな展開を何度夢に見たことか。

夢は夢のままで現実には押しつぶされるものなのか、それとも夢は現実になるものなのか、その最初の関門が今ここで始まる。

さあ、主人公を始めよう

俺に向かって走り来るウルフに意識を向けながら、俺はそんなことを考えた。



## 6【主人公】オレとあの子と魔物の襲撃【始動】

ウルフが攻撃を仕掛けてくる。

俺が剣で受ける。

仕切りなおす。

ウルフが攻撃を仕掛けてくる。

剣で何とか押し返す。

仕切りなおす。

言葉にすれば、これだけ。

俺はそれを、ただひたすらに続けていた。

何回受けたかも、何分経ったかも、今の俺にはわからない。

他の事を考える暇も無いほど、俺はそうやってウルフと戦っていた。

ウルフと対峙し初撃を奇跡的に弾くことが出来た俺は、今の俺ではウルフには勝てないということを悟った。

まず、速さが段違いだ。

ウルフと俺の体の間に剣を構え、体当たりしてきたウルフになんとか剣をぶつける、俺にできるのはそれくらいしかないほど速さに違いがある。

つまるところ、攻撃なんてしょうが無いのだ。

攻撃をしようと動きを変えるならば、次の瞬間に直撃を受けていてもおかしくは無い。

そしてまた、重さが違う。

ウルフの体重がどの程度かはわからないが、その攻撃はウルフの全体重をかけたものだ。

威力＝重さ×速さ　とかだっただろうか。まあ細かい式とかはどうでもいい。

ただ言えることは、少しでも気を抜けば例え剣で受けても吹き飛ばされるであろうということだろう。

さて、以上の二点から受け止められる解は何か。

答えは簡単。『俺は受けに回ることしかできない』

それも、『受けに回れば間違いなく受けることができる』ではなく、『受けに回れば受けることができるかもしれない』というレベルだ  
が。

とすればだ。受けに回る以上ウルフにダメージを与えることもできず、逆に俺のHPは削られていくだけになるだろう。

常識的に考えれば明らかにジリ貧の状態。

本来ならば、俺はわずかな可能性に賭けてでもウルフを倒すべく行動するべきなのかもしれない。

何も行動できなくなるほど体力を削られる前に、体力が残っているうちに何か仕掛けるべきなのかもしれない。

だけど、俺はあえてそれをしない。

守って、守って、守って、守る。そしてただひたすらに時間を稼ぐつもりでいる。

何故か。答えは簡単だ。時間さえ稼げば、おっさんが戻ってくるからだ。

一応問題点として、おっさんですら勝てない可能性があるかもしれないというものもあるが、あのおっさんがウルフなんぞに負ける姿を思い浮かべることなんてできん。

名付けるならば、『俺が無理なら、おっさんに倒してもらえばいいじゃない』作戦！

そんなことを一瞬のうちに考えて、俺は再び襲ってくるウルフの一

撃に意識を集中した。

長い長い戦いが続く。

何分も経ったのか、それともまだ一分も時間を稼げていないのか。次々と増えていく傷、削られていく俺のHP。

飛び掛ってくるウルフの爪を弾く。その際に、また傷が増える。しかしそんなことに気を取られている暇は無い。

ウルフは着地と同時に再びこちらに飛び掛ってくる。

今度は口を大きくあけ、牙からよだれをたらしながら、俺に噛み付こうと飛び掛ってくる。

俺はその頭に向けて正面から剣を叩きつける。

とても重い感覚。そして、とても硬い感覚。

剣はウルフの皮膚を切り裂くことも無く、まるで棒をぶつけたかのごとく押し戻される。

しかしウルフにも多少のダメージは入ったのか、仕切り直しするかのごとく俺から距離を取る。

ウルフが距離を取ったおかげで少し心に余裕ができた俺は、あることに気が付いた。

直前に一連の流れで、俺はウルフに『剣を叩きつけている』。

そう、剣を合わせているだけじゃない、叩きつけることができるのだ。

戦闘開始当初は、剣を合わせるのがぎりぎりだったにもかかわらず……だ。

もしかして、倒せるんじゃないか？

そんな思いが頭をよぎる。

ウルフは、そんな俺の思考を中断させるかのように再び俺に向かって飛び掛ってきた。

そして俺には、そのウルフの攻撃が見えていた。

見える！

そう思いながら、剣をぶつけて対応する。

俺の余裕の動作に警戒したのか、ウルフは再び距離を取った。

そこで俺は再び考える。

速度的には問題無い。

問題はダメージが通るかどうかだ。

俺の剣ではウルフの皮膚に傷をつけることができない。

ならどうするか。考えるまでも無い、皮膚が硬いなら軟らかい所を狙えばいい。

腹、狙いようが無い。目玉、的が小さすぎる。鼻、同じく小さい。口の中……ウルフが大口開けたときに限れば可能。

どのように？ 飛び掛ってくるウルフにあわせる以上、『突き』の一択。なら俺の取るべき手段は……。

剣を持つ右半身を弓のように引き絞る。

左手を剣先に添えるように前に出し、狙いを定める。

足は軽く曲げて前後に開く。

さあ、準備は整った。後はウルフを倒すだけだ。

ウルフは俺の構えに戸惑ったか、はたまた俺の気配の変化に反応したか、先程よりもしっかりと助走をつける様に後ろ足を動かしている。

そして、一瞬の静寂。

弾けるように飛び掛ってくるウルフ。

俺はその開かれた口に向かって、ただ一つの突きを放つつ！

突き抜ける肉の感触。  
飛び散る血の暖かさ。  
そして聞こえる、生命の断末魔。

「あつ……、あああああああああああああああ  
ああ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

俺の目の前で光と化していくウルフを見て、俺は勝利の雄たけびを挙げた。

戦闘を終えた俺は、とりあえずウルフが消滅した後に落ちていた赤い石みたいなのを拾っておいた。

魔物から出た赤い石とか、どう考えてもお金になる何かです、本当にありがとうございました。

「リヨウさんっ！大丈夫ですかっ！？」

隠れて見てたんであろう、キルトが大声を上げながら俺の所に走ってきた。

「大丈夫だ、問題無い」

「そんなわけあるはずないじゃないですかっ！」

oh...心配してくれる美少女っていいよね！

……そんなわけないと思ってたら聞くなよとか、そんな黒いこと考えてないですよ？

「全身そんな血だらけになって……無茶すぎですっ！」

「いやいやおぜうさん、これにはウルフの血も混ざってましてですね」

「ウルフの血は一緒に光となって消えてますっ！」

な、なんだってー！

っーことは、え、何、この全身をほとんど余すことなく覆っちゃってるような血が、全て俺のものだと？

HHHHA、何を言ってるんだいお嬢さん。そんな状態だったら、

俺既に死んでるだろ、常識的に考えて。  
とはいえ、一応確認しておこう、うん。

「……本当に？」

「もちろんです！いくら私がこまめに回復していたからといって、血液までそう簡単には増えませんよ！」

「……こまめに回復していた？」

「あれ、知りませんでしたっけ。私こう見えても、回復魔法の使い手ですよ」

つまりあれですか、自分一人の力で魔物倒したぜひゃっはー！って思ってたら、回復の支援付きだったわけですね、わかります。  
あ、テンション下がってきた……。

あれ、ついでに痛みが復活してきた……！！

体中痛くなってきたでござる！ギブミー回復魔法……！！

「あつ、リヨウさん、あれラルフさんじゃありませんか？」

そんなこんなで、キルトに今一度回復魔法をかけてもらおうとしたちょうどそのタイミングで、おっさんが現れた。

俺の姿を見て一瞬ぎょつとしていたようだが、キルトと一緒に手を振ってやるとなんかまあ安心したようだった。

俺の体まだ痛いままだけどね！

そうしておっさんは手を振り返そうとして、もう一度固まった。  
今度は、目線が俺を向いているようで少しずれている。

俺のその更に奥を見ているような……。

「

」！

おっさんが何か叫びつつ、こちらに向かって走り始めた。  
俺は後ろを振り返る。

そこにいたのは、ウルフを更に巨大化したようなやつで、口にはなんかエネルギーみたいなのが溜まっております。  
その矛先は俺というか、キルトっぽい。

大きな魔物＋口にエネルギー＋こっちに向けている＝なんかエネルギーの塊みたいなのが飛んでくる

そこまで考えた時、予想通りエネルギーの塊みたいのが発射されたんですけどおおおおおおおおお！

エネルギーの塊それ自体は、俺とキルト両方飲み込むほど大きくない、それだけ確認した俺はキルトを突き飛ばしていた。  
そこに手加減などしている暇は無い。

きやつ、と言う可愛い声と共に、胸元に違和感。  
次いで襲ってくる激痛。

痛みの基に目を向ければ、何処にこれだけ残っていたのかと思う位に大量の血液が流れている。

そして俺の口からも……。

全ての動きをスローに感じながら、俺は地面に倒れる。

どうせなら、エネルギーの塊食らう前にスローになれよとか、どうしようもないことを考えながら。

俺の後ろを、ものすごい速度でおっさんが通り過ぎていく。

キルトは俺を見て、慌てて駆け寄ってくる。

何かを大声で叫んでいる。

きっと俺を心配してくれているんだろうなと思うと、その声を聞くことができないのはもったいないなって思ってしまった。

どうせ最期だ、そう思って無理矢理キスしてやろうとキルトの顔に手を伸ばそうとするが、手が動かなかった。



ならばせめてその顔だけでも見ておこうと思っても、今度はまぶたが勝手に下がっていった。

これで終わりか。我ながら短い異世界生活だった。全てを諦め、体全体の力を抜く。

体が熱を持ったのか、徐々に体が熱くなっていく。

死ぬ時は体が冷えていくと思っていたので、新発見だった。そうしてどんどん体が熱くなっていく。

熱く……………

熱く……………

あつく

「熱すぎじゃあああああああああ！！！！ってあれ？」

あまりの熱さに叫んでしまったわけだが、俺にはまだそんな力が残ってるのかしら？

目を開けてみる。普通にあいた。

手をわきわきさせてみる。エロイ具合に手が動いた。

首を傾けてみる。そこには、なんかものすごい光を放っているキルトがいた。

え、何これ？さっき言ってた回復魔法？何これ死ぬ寸前から復活とか万能すぎじゃね？

何、これがこの世界のデフォな回復とかだったりするのか！？

いやいや馬鹿な、こんな馬鹿みたいな回復デフォとか問題しかない、多分きつと。

つまり、キルトが特別なんだよ！な、なんだってー！

まあそうだね、当たり前だよ、こんな所であんなおっさんと二人で住んでる時点で気付いてしかるべきだったわ。

よし、決定！

そうして一人テンパリながらキルトを見てみると、なんか変なのが見えてきたでござる。

キルトに降りる様折り重なっているそれは、天使の格好をしている。うん、ここに来る前に見た記憶あるわ、そのいやに意味ありげな笑顔含めてなっ！

そして、俺の意識今度こそ落ちていった。

6【主人公】オレとあの子と魔物の襲撃【始動】（後書き）

次回第一部完

7【今までが】っと、ここでネタばらし！【プロローグ】（前書き）

今回で第一部完だと言ったな。あれは嘘だ！

すいません、なんか無駄に長くなりました。  
世界の説明回です。

## 7【今までが】っと、ここでネタばらし！【プロローグ】

「知らない天井……じゃねーな、ここ」

この世界についてから、既に何回か見ている天井を見上げながら目を覚ます。

どうやら俺はぶっ倒れて、運び込まれたらしい。

「目が覚めましたか、ご主人様」

ん、何処からともなく声が聞こえてくるよ？

というか、凄く近くのような気がするんだよ？

顔を横に向けると、一緒にベッドに寝ている美少女がいるんですが何これ怖い。いや嬉しい。

とりあえず落ち着け俺。フリーズした頭に再起動！

.....

.....

.....

OK、再起動終了！

とりあえず、抱きついとくか、状況的に考えて。

10分くらい少女の柔肌堪能したでござる。

寝起きの俺はこれで満足である。さすが紳士、ただし変態と言つ名の。

「もう終わりですか、ご主人様？」

「さすがに状況説明が欲しいでござる」

リアルでござるとか言ってしまった。後悔はしていない。  
つか、キャラ作るのめんどくね？  
もうね、脳内の会話とかそのままの感じで喋っていいよね？

「もちろんかまいませんよ」

「思考読むのやめれwww」

キルトの格好だけど中身ルナですよ、あなた。  
ご主人様とか呼ぶのルナしかいねーし。

「んじゃ、とりあえずネタばらしぷりーず。  
長くなりそうなら3行で」

「ご主人様の深層意識を読み取って、わざと超えられる程度の試練  
を入れてみた。」

初期値は低いけど、超成長つてのもいいよね！っていう深層意識  
を（ry

この世界の神様である私に言えば今後なんでもできます」

「なんとなく分かったけど分かりづれえw」

その後丁寧に説明させて見るとこんな感じだった。

- ・俺が異世界で俺TUEEEEEEEしたいと言っていた。
- ・だけど心の中を覗いた時、弱い主人公が何とか敵を倒すっていうのもいいよね！って思ってるのを発見。
- ・両方を満たす条件を探す。
- ・最低数値スタートにして、弱いうちに願望を叶えさせて、それ以降で俺TUEEEEEEEさせようということに。
- ・危機感とかないと面白くないだろうし、ルナに騙されたと思わせおいた。
- ・そしてネタばらし（今ここ）

つまりこれから俺TUEEEEEEEできるわけですね、わかります。

ステが異様に伸びるのも、ここに解があったのね。

「そついや、ステってどのくらいどんくらい凄いの？数値だけだといまいちわからんのだが」

「そうですね、5が一般人、平均10で駆け出し冒険者、平均30位で一流冒険者ですね。平均50を超えてるのは大陸で数人です。

ちなみに、ご主人様の場合は、上げようと思えば1年以内に大陸最強になれますね」

「リアルチート乙。だがそれがいい」

「称号やスキルについても説明しますか？」

「よろしく。主に俺TUEEEEの為に」

称号とかユニークスキルとか、あるのは分かるが効果がいまいちわからなかったしな。  
知っておく必要はあるだろ、多分きつと。

「まずはステータスを確認していただけますか？」

「おけ。スキル発動つと」

N a m e : リヨウ

称号：創造神に寵愛されし者

（真なる勇者）

（冒険者の心得）

（施政者の心得）

（王の心得）

（神の化身）

（エロの化身）

H P : 930 / 930



マナ：0 / 0 (0)

## ステータス

S t r 1 5 / 9 9

A g i 1 3 / 9 9

D e x 1 2 / 9 9

V i t 1 8 / 9 9

I n t 1 / 9 9

## ユニークスキル

### ・人生の選択（固定解除！）

どのような人生を送るか、設定できる。

本人の意思にかかわらず、数値に応じた人生になる。

数字が大きいほど高い。1 ～ 5 で変動。最大 5

シリアス 1

エロス 3

### ・神の眼（真実の目からランクアップ！）

神の眼を持ち、全てを視認することが出来る能力。

自己及び他人の名前・称号・ステータス・ユニークスキル・スキルを全て確認することができる。

アイテムなどの名前、性能を把握することができる。

・主神ルナの寵愛（NEW！）

主神ルナの絶対的な愛を受けている

各種ステータス・スキルの上昇率の増加

特殊ユニークスキルの獲得

特殊称号の獲得

主神ルナの呼び出しが可能

・魅惑 チャーム（NEW！）

異性に対する圧倒的な魅力を発揮する。

好感度上昇時上げ幅が大きくなる

好感度下降時下げ幅が小さくなる（まったく下がらなくなるわけではない）

・擬態（NEW！）

自身を擬態し、他者を欺く

実際の称号意外の称号を対外的に付けることができる。

同様に、対外的にステータスをいじることができる。

・性魔術（NEW！）

エロゲー的主人公の必須スキル！

私はこれ無しでも落されました！

行為相手のユニークスキルのコピーが可能

行為相手に自分の持つユニークスキルをコピーすることが可能

行為相手のステータス・スキルの成長率が上がる。

性行為に伴う快感が、双方とも増加

スキル

・家事      L V 4

・両手剣    L V 1 5

色々増えすぎワロタ w w w w w

ステとかあがりすぎだろ w w w w w

いつの間にか一般冒険者レベルかよ w w w w w

性魔術のとなんかおかしいぞ w w w w w w w w w

そしてあれか、ネタばれしたから色々解放されたのか w w w w

「それでは、細かい説明をさせていただきますね。

称号はその人の現在の状況を最もよく表しているものです。

商人なら商人。旅人なら旅人といったようにそのまんま表示されます。

ただ、旅人であっても何者かに追われていたりすると、追われている旅人といったように、称号に若干の変化が起こります」

「俺の称号はつと……創造神に寵愛されし者か」

「改めて口に出されると、恥ずかしいですね……」

顔を赤らめて、少しはにかむルナ。何これ可愛い。  
場所が場所だが我慢だ、説明が終わるまで我慢だ……我慢なんだよ！

「え、えーっと続けますね。

先ほど、称号はその人の現在の状況を最もよく表しているといいましたが、いくつか例外があります。

例えばご主人様がお持ちの『真なる勇者』です。

これをセツトした場合、状況が称号に合わせようとしています。  
言い換えれば、勇者になるようにイベントが多発するというわけですね。

ご主人様がお持ちの他の称号もほぼそちらのタイプです」

「つまり、俺はどのような主人公になるか自分で選べるというわけか。

……ちなみにエロスが多いのはどれだ？」

「鉄板でエロの化身ですね。

ただ、この称号はエロスしか無いようなものなので、ある意味物足りなくなるかもしれません。

主人公しながらエロスとなると、お勧めは冒険者の心得でしょうか。

エロスもそれなりにありますし、冒険者として様々なイベントが起きますから。

もちろん俺TUEEEEEEEEEもできますし」

ふむ、とりあえず冒険者の心得が第一候補だな。

エロスばかりだと面白くないだろうし、英雄とか王とかメンドクセ。冒険者で好きに生きるっていいよね！

「ちなみにですが、勇者の称号を持つ者は他にもいます。

ですので、ご主人様が『真なる勇者』を付けない場合、別に勇者の称号を持つ者が勇者として活躍することになります」

「勇者の称号を持つてるものがある程度活躍している状態で、俺が『真なる勇者』付けたらどうなるん？」

「付け替えた後から、ご主人様こそが勇者に相応しいとみんな思えるようなイベントが乱発しますね

旧勇者は死んだりしませんが、徐々に勇者では無くなっていきます」

創造神マジばねえ。

何でもかんでも俺がメインなんですネ、わかります。

「続いて、ステータスは先ほど説明しましたし問題ありませんね。

ユニークスキルについて説明させていただきます。

これは、各人が一人につき一つ持つことができる特殊スキルです。ご主人様は特別ですので、いくつもお持ちですけどね。

様々な種類があり、ご主人様の様な特殊なスキルから、単純に特定ステータスの数値が倍になるようなものまで様々です。

入手方法も様々で、生まれた時から持っている者、特定の職業を極めて初めて手に入れる者、神に祈ることで簡単に手に入れる者まで様々ですね」

ふむ、とすると性魔術無双になる予感。  
ご都合主義的にチャームもあるしな。  
ただ問題は、男がいいユニークスキル持ってた時なんだが……。

「ご主人様の周辺に現れる人物で、欲しくなるようなユニークスキルを持っているのは女性の方にしかありませんので問題ありませんよ」

さすがルナ、痒い所に手が届く！

「最後にスキルについてですが、これは単純に熟練度ですね。  
慣れればなれるだけ、上手くなれば上手くなるだけあがっていきます。

これも掃除洗濯から始まって、農耕や商売、両手剣から盾まで様々ですね。  
ステータスと同様、5で一般人程度。50で国一番と言う所でしょうか」

「それが全部表示されんの？  
さすがに多すぎて面倒じゃね？」

「その点については問題ありません。  
基本的には称号に関するスキルか、特に秀でているスキルしか見れないように設定してありますから。  
もちろん見ようと願えば全て見ることは可能ですけど、お勧めは

「しませんよ」

「だねえ。場合によっては情報多すぎて脳みそ沸騰しかねん。ああそつだ、擬態ってユニークスキルがあるところを見ると、他の人もステとか確認できるんじゃないよ？」

「その場合どの辺まで見れるの？」

「そうですね、最低ランクの『真実の目』で名前と称号まで。一つランクが上の『精霊の瞳』で名前と称号にHPとマナ、後ステータスが確認できます。」

「これらのスキルを持っていない人は自分のHPやステータスですら確認できません。」

「唯一確認できるのが、ユニークスキルですね。これは教会で確認できるようになっていきますので」

「俺の成長具合から考えて、ある程度静かに暮らすなら『擬態』は必須って訳ね。把握した」

「とりあえず、今説明しておくべきことは以上ですね。」

「後は生活をしながらにでも、徐々に知っていったほうが異世界物として面白いと思いますので」

「まあルナがそういうならそうなんだろうな。ありがとう、助かったよ」

感謝の念を込めて、頭をなでなでしてみる。

真っ赤になって小さくなってるでござる。

可愛すぎて困る。

「あの……でしたら……ご、ご寵愛を賜りたく……」

凄く小さい声で、とても恥ずかしそうに言っルナ。  
もうね、辛抱たまらんですたい！

「今夜は寝かさないぜH A H A H A！」

「まだ朝ですよ……」

こうして俺は、発言に責任を持って翌朝まで頑張ったのだった。  
HPが高いっていいねー！



7【今までが】っと、ここでネタばらし！【プロローグ】（後書き）

次回こそきつと第一部完！

しかし設定って考え始めると無駄にこっちゃんよね！

困ったもんだH A H A H A

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5878m/>

---

【最強系（笑）】俺の異世界冒険譚【最低系（笑）】

2011年5月27日17時31分発行